

つたらこう暑いと愚痴の程度を越してだまってゐるに限りません。今、珍しく、すざましい音をたつて遠くから夕立が迫ってきました。思ひきつて屋根をたたきだしました。殆んど狂はしいばかりの眼で外をながめてゐます、この雨は多分、お羽黒蟻の舞ふ秦野の森の泉にも降つてゐませう。ふとそんな事が思はれます。

曲水はまた印刷所の方が工合悪しく六日にしか出ないさうです、ま、ゆつくり遊んでいらつしやい。さようなら

八月二十一日 青木幸太郎宛

東京都牛込区市ケ谷富久町百二十二

静岡市鷹匠町 海野長頸子

いつまでも暑き事に候 御無沙汰いたしをり候へど御変りもなき事と存じ候。小生句作も出来ずただく漫然と日を暮しをる始末に御座候 曲水事務の方もすでに御手に歸し候事なるべく嘸かし御手数なるべし事と御察し申上候、本日徂春兄よりのはがきにて八月号も再校まで運びし由、ひたすら刊行をまちをり候 残暑の庭に蜀葵が日々咲いては落ち、夜は富士の根に稲妻がたち候 且今は蟬が暑く候。苔雨君はじめ諸兄によりしく御伝え願はしく候 匆々

八月二十五日 東京・青木幸太郎宛

静岡市鷹匠町 海野 厚一

思ひがけなき御無沙汰いたし候

御かはりもなく御句作の事と存じ上げ候 小生帰省後一向なまけをり候て末だ曲水句帖も一句も出来ぬ有様閉口いたしをり候。

最早どうやら秋風立ちそめ候にまた今年も夏を充分作つてなきは気がもめ候。曲水の御仕事おいそがしく候はん。先生はじめ諸君あいかはらず御多作に候や。曲水八月号ひたすら待ちをり候。

昨日小さな池を浚ひ今日は朝より腰いたくて弱りをり候

九月十七日夜 青木幸太郎宛

静岡市鷹匠町 海野 厚一

秋風吹く日と相成り候。御健勝に候や、小生、一向に御ぶさを重ね、いつぞやの御丁寧なる御手紙に対しても御返事差上べくして差上ず、最早御詫び願う余地なきかと恐縮いたしをり候 吉野先生が御帰京なされ候由過日の歓迎句会は定めし賑かなりし事と存候、不参遺憾に候 さて明日はどうあつても上京いたすべくその上の御面晤をたのしみ候。流觴居の秋草見る事もまた楽しみの一つに御座候。匆々

俳句評釈

水草の吹きよりし人や草の市 水 巴

(曲水316)

夜涼を趁ふ人々に賑ふ町も、草市の立つた一角は人の往来も何となくしめやかである。蓮の花、真菰、溝萩などの哀れくしい中に灯つた小商人の灯も、芋殻や溝萩を提げて通る女の姿も思ひなしか一様にしめやかに眺められる。同じやうに魂迎へる小買物に來た人々の心は懐かしくしめやかに思はれる。こここの商人の青々しい灯の囲りに寄り合うて仏のものを買つてゐるあの人々は、たまたま風に吹かれて寄り合うた水草のやうな気がする。いや、水草の吹かれ寄つたのではあるまいか。

比喩もここまで来て初めて価値を生ずる。